

Title	スペイン語に主語代名詞削除は存在するか
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.3-p.12
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80454
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スペイン語に主語代名詞削除は存在するか

¿Existe la delección del pronombre sujeto en español?

出 口 厚 実

Atsumi DEGUCHI

Es bien sabido que en español el pronombre personal sujeto se calla frecuentemente en la estructura patente, y para este fenómeno casi todos los tratados de sintaxis según la teoría de la gramática generativa transformacional suponen una regla transformacional—la delección del sujeto pronominal o del nominal.

El presente estudio plantea un problema sobre la necesidad de tal delección en el componente sintáctico del español, y llega a la conclusión siguiente: la delección de sujetos pronominales sí que existe, pero no en forma de transformación opcional como la que algunos gramáticos han propuesto, ni es parte de la delección general del sujeto nominal. La transformación deletiva de pronombres personales sujetos no debe considerarse como un fenómeno aislado sino un aspecto de la derivación integral de los pronombres. Esto facilita la comprensión del paralelismo sintáctico entre los pronombres personales sujeto y objeto.

変形生成理論によるこれまでの西語文法はほとんどどれも主語人称代名詞削除規則を仮定する。たとえ、はっきりと規則化されない場合であっても、暗黙裡にこれを前提にしている。筆者の知る限り、この規則に疑問が表明されたり正面きって反論が唱えられていないだけでなく、積極的にその存在理由を裏付ける十分な証拠が示された形跡がない。本稿は従来概念による任意的削除変形が、実際の西語統語論に見られる無主語現象を正しく、また最も簡明に説明するものではないことを指摘する。そして代名詞削除そのものの必要性は認めるが、これを西語代名詞配置に関する一連の変形の中に位置づけて考え直すべきであることを論ずるつもりである。

1) 無主語文

西語で表面構造に文法的主語が現われないことは珍しくない。下記の3文はいずれも動詞 *estudia* の主語が表面に姿を見せない。

- (1) *Estudia el español.*
- (2) *Juan dice que estudia el español.*
- (3) *Juan quiere ir a España y estudia el español.*

(2)の補文は Equi-NP Deletion によって同一指示の主語 Juan を失っており、また(3)の後半に Juan が省略されるのは被接続文の anaphoric 主語を削除する規則が存在するためであるとみられる。問題は特に(1)のように、単文で主語を欠く構造の派生をどのように取り扱うべきかという点である。ここで「無主語文」と呼ぶのは(1)のタイプの文である。

2) 代名詞主語削除説

Langacker (1968) は (4a) (4b) 両文を関連づけるのに 任意的な 代名詞削除規則 optional pronoun elision rule があると主張する (p. 218)。

(4) a. Yo estoy en la casa. \Rightarrow

b. Estoy en la casa.

同じく Langacker (1970 : p. 172) でも(5)が(6)の変形から生まれるとみる。

(5) Trabaja.

(6) él trabaja \rightarrow trabaja

Permutter (1971) も代名詞主語削除を認める一人である。彼によると、西語の非強意代名詞は派生後期に削除される。(p. 23)。Langacker の考え方に立てば (1) は基底構造として次のいずれかを持つことになる。

(7) a. Él estudia el español.

b. Ella estudia el español.

c. Vd. estudia el español.

また(1)に限らず、3人称単数の定動詞形を含む無主語文が組織的多義性を示すのは、上のような変形が原因であるとみなされよう。

3) 主語削除説

Stockwell, Bowen, Martin (1965) は、西語の代名詞化は代名詞が名詞に交代するのではなく、名詞の省略とその限定詞の名詞化によって達成されると説くと共に、¹⁾ 無主語文は文脈から了解され得る主語 NP 全体の削除から生ずるものであることを示唆する (p. 240)。Goldin

(8) Juan se fue ayer \Rightarrow Se fue ayer.

(1968)はこの考え方を発展させて格文法の枠組みの中に明確に規則化する。彼に従えば、Subject Deletion と代名詞化は Anaphora と名付けられる次の規則で表わされる (p. 59)。

(9) i) 主語であるどの NP も削除され得る。

ii) 無生物主語を除きどの NP も代名詞で表わされることがある。

もし主語削除説が正しければ、(1)はその主語に関して無限にあいまいな解釈を許すことになる。また、代名詞主語が表面化しないことを特別に問題として提起すること自体が無意味であって、主語代名詞削除規則は存在しないとみなされる。

4) 1・2人称代名詞

Goldin (1968) は、代名詞なるカテゴリーは表面構造にのみ関連するとし、深層における non-anaphoric 代名詞の存在を否定する (p. 57)。しかし (4a) に含まれる yo や同類の 1・2人称代

名詞は彼の Anaphora によって導出できないから、元々深層構造にあると考えなければならない。これを代名詞と見ず名詞あるいは他の名称で呼ぼうとも、(9) i) の Subject Deletion を受けることになる。即ち、少なくとも 1・2 人称の代名詞については彼も削除を認めざるを得ない。²⁾ だから主語削除説は代名詞削除が全く存在しないことを主張するのではなく、代名詞と名詞の削除に有意義な差を認めないということだと解される。代名詞主語削除説と最も鋭く対立するのは非前方照応 3 人称代名詞の見方に関してである。

5) 「削除」は optional か?

Langacker と Goldin の両説は、上に比較したような違いがあっても、(10)が(11)の根底にある

(10) Estudio el español.

(11) Yo estudio el español

構造から主語の任意的な削除により導かれると見る点で完全に一致する。ところで(10)と(11)の文意の間にははっきりとした相違が認められる。西語使用者は(10)を何らかのあるべき要素が省略された文とは思わない。両文を比べると、むしろ前者の方が無色で中立的な自然な文である。(10)が仮に x という意味をもつとするならば、(11)はそれにある種のニュアンスを付加された $x + \alpha$ と考えられる。もし α が(10)と(11)に単なる文体的な variant である以上の内容差を生ぜしめるものであれば、両文が全く同じ基底構造をもつと見ることは間違いであり、また表面の主語の有無は任意的な削除変形によるものではないとされる。それ故、もう少し α の実体を詳しく掘り下げて調べる必要があろう。

6) 主語代名詞使用の実際

伝統的な文法書は主語（人称代名詞）の省略についていくつかの規則を列挙するのが常である。その中で次の 2 点はほとんどの文法家の観察の一致するところとみてよいであろう。

(12) i) 人称代名詞主語は通常省略される（又は、使用されない）。

ii) 次の場合、代名詞は用いられる。

a) 主語を強意的に表わす時

b) あいまいさを避けたい時

事実、これらは主語に立つ人称代名詞の使用・省略の大筋をつかんでいると言える。一般に指摘されているとおり、西語の動詞屈折接辞の形態にかなりの弁別機能があって、それ自身で主語の人称・数を指示できることが(12)i)の背景になっている。ii) b) に言うあいまいさとは動詞人称語尾が若干の時制で 1 人称単数・3 人称単数を区別できない事実や、(1)と(7)との間にみられるような 3 人称代名詞間の違いを表現できないことを指す。先に見た(10)の場合、このようなあいまいさはない。もし他に適切な理由づけができれば、(10)では主語に与えられている「強意性」が α である。しかし(7a)で *él* が「強意的に」用いられているのか、ii) b) の理由だけなのか判然としない。もしあいまいさの回避のために、言い換えれば単に主語を示す目的でのみ非強意的に代名詞が使用されるケースがあるならば、3 人称語尾の動詞形は他の人称の場合よりも主語代名詞を伴う例が格段多いはずである。このような論理的帰結から、例えば Criado de Val (1957 : p. 132), M. Alonso (1968 : p. 55) などは語尾の多義性のゆえに 3 人称代名詞が最もよく用いられると断言す

る。これが事実であれば(7a)における代名詞使用は全く文法的に規定される 統語的手順の任意性に過ぎず、深層構造での(1)との相違に根ざすものでないことになる。しかし統計的な調査(拙稿, 1968)に見る限り、このような可能性は否定される。ここにその数値をまとめると次のとおりで(p. 112 第4表から)、むしろ1・2人称代名詞の方が省略される割合が少ない。

(13) 代名詞主語の使用率

1・2人称	18.0%
3人称	15.0%

上の数字は、ずば抜けて使用率が高く、代名詞として扱うことに疑問の余地がある *usted, ustedes* を仮に3人称代名詞に含めての計算結果である。一般の3人称代名詞は5.9%~11.5%を示し1・2人称代名詞よりも一段と低い。更に同上の調査によると、1・3人称単数で語尾が共通になる法・時制とそうでない場合とにおける代名詞使用率を比較してみてもそれほど差がない(15.5% : 11.5%) ことがわかる。

7) α の意味

以上から、動詞語尾の形態的多義性だけでは代名詞の使用を引き起こす要因にほとんどなり得ないと考えられる。結局、(7)のような3人称の場合を含めて単文における主語人称代名詞の存在は、一般に、主語を強意的に対比的にあるいは焦点化して表現すると見るべきである。「強意性」というのはやや不明確な概念ではあるが、一定の意味解釈をもつ以上、(10)と(11)が同一の深層構造から派生されるとみなすことはできない。同時に、「強意」を伴う有標的な〔marked〕構造である(11) = $x + \alpha$ から任意的に α を削り取ることで無標の〔unmarked〕(10)を導く(4)のような変形は認めることができない。主語代名詞を削除する変形は基底で〔+emphasis〕〔+contrast〕〔+focus〕…etc. の素性のいずれをも持たぬ主語に対し義務的に適用されるとするべきである。

8) 一致規則の再検討

主語・動詞間の人称・数一致変形は主語NPに含まれる関連の諸素性が動詞へ copy された後 *segmentalization* を受けるか、又は直接動詞の右へ Chomsky-adjoin され则认为る。主語が非強意代名詞である場合のこの過程を簡略化して図示すれば次のようになるだろう。

(14) a.	S V-	S = 主語
b.	S V-s	V- = 人稱・数要素を除いた動詞形
c.	V-s	s = 人稱・数形態素

$a \rightarrow b$ は一致規則の構造変化を表わし、 $b \rightarrow c$ は主語人称代名詞削除変形である。(14)の図式を見ると、これが(非強意)目的格代名詞を形成するプロセス(c.f. 拙稿, 1972)と非常によく似ているのに気づく。Sとsとは同じ内容で、その差は音形実現の後、始めて具体化されるものであるから上の派生では同一記号で表わしてもよい。目的格代名詞をOとして、2つのケースを対照したのが(15)である。

(15)	A	B
a.	S V-	V O
b.	S V-S	O-V O
c.	V-S	O-V

(16) Bは動詞後の〔+PRO〕を動詞前へ移動させる変形で、bはその中間段階に生ず構造である。同じようにAにおいてもSが動詞の左から右へ移され、その途中にSV-Sが生まれると考えたらどうか。即ち、これは代名詞主語がそのまま動詞屈折接辞中の人称・数形態素として表面化されるとみることを意味する。従来、主語・動詞一致規則とされているものの一部を代名詞移動変形の中に組み込まれるとすれば主語及び目的格代名詞の形成・省略についての一般的規則を想定することが可能になるのではないだろうか。(16)はVを軸としてSとOが完全に対称的な位置関係にあることも注目すべきである。

9) 人称・数語尾の独立性

前節の(16)AをBと平行した関係にとらえるためには、人称代名詞主語は接辞化されて動詞の人称・数語尾に変わると分析する必要がある。しかし、人称語尾は主語とみなし得る程の自立性がないとする批判的見解から、このような見方は疑問視されるかも知れない。これまでの西語文法の多くは、³⁾ 動詞(語尾)形態が主語を十分に示すとか、動詞述部はそれ自身に主語を含むなどという表現の中に、部分的に人称接尾辞が主語の任務を果たすことを認めている。だが、am-o, am-a, am-e, am-é etc. の屈折形態では、法・時制又は相を表わす形態素と人称・数形態素とに分割が不可能ではないか、あるいは仮に形態素を設定しても恣意的な判断に左右されるという主張がある。実際、複数人称については比較的問題がないが、上記のような -o, -a, -e, -é etc. に関しては、Hall (1945), Hockett (1947), Nida (1949 : pp. 130—137), Saporta (1959), Stockwell-Bowen-Martin (1965 : pp. 106—107), Bull (1965 : pp. 112—120) などの形態素分析で様々な抽出の仕方が見られる。中には Saporta (1959) のように‘人称’形態素を欠いた語尾や‘時制’、‘人称’という2つの意味成分をもつ1つの形態素を認める分析もある。一般にこれらの分析が十分に明確な人称・数標識をつかむことができないのは、西語のそれが不明瞭であるからなのではなく、Item and Arrangement 方式という方法論の限界を示している。これに対し、表面形式の内側に潜んでいるものを含めて音韻現象の規則性を最大限にとらえる音形部門を備えた生成文法では、動詞屈折形態素を明確な独立的単位として取り出せる。ここでは拙稿(1971 : p. 54) の分析を中心に、西語の人称・数標識は活用類にかかわらず次の基底形をもつと仮定する。

(16) 1 p. sg. o/「直・現在」～i/「直・過去」～ø/その他の時制

2 p. sg. ø/「直・過去」「命令」～s/その他の時制

3 p. sg. u/「直・過去」～ø/その他の時制

1 p. pl. mos

2 p. pl. d/「命令」～is/その他の時制

3 p. pl. n

上記の諸形態は動詞に接辞化された、テーマ母音、法・時制・相標識と共に音形規則の適用を受けてそれぞれの定動詞形として実現される。⁴⁾ 1 p. pl., 3 p. pl. を除けば各々2ないし3ケのvariantをもち、更に1 p. sg. と3 p. sg. は多くの時制で互に識別不可能なø形態をとることになるが、このために人称・数形態素の独立性がおびやかされるとは考えられない。

また人称代名詞主語が(16)の各形態をとって動詞の接尾辞の中に現われると見ることは少しも不自然ではない。²¹⁾ それはちょうど目的格代名詞が *me, te, lo* などの前接形又は後接形として出現するのと平行している。

今後、(16)のような人稱・数要素を人稱代名詞の接辞形と呼ぶことにする。

10) 西語代名詞の特徴

主語人稱代名詞と目的格代名詞派生の類似は、(16) A B でみた動詞に対する位置及び移動の相似に止まらずいくつかの極めて重要な統語的制限や音形的特性にも及んでいる。

主語人稱代名詞は、通常、接辞形のみで示されるが強意代名詞を動詞の前又は後に付加した(17b, c) も適格な文とされる。これらの文で a が最も無標で b, c の順に有標性が高くなる。

- (17) a. Hablo español.
- b. Yo hablo español.
- c. Hablo yo español.

目的格の代名詞に関して(18)に見られる3つの文が成立する。a, b, c の中で有標性の度合は(17)の場合と同様である。これらの関係を再び(15)にならって図式化すると次のようになる。主格・目

- (18) a. Le espero.
- b. Le espero a él.
- c. A él le espero.

的格代名詞は表面構造への現われ方が著しく似ていることは(19)を一瞥すればわかる。最も通常

- | | | |
|------|--------------------------------|---------------------------------|
| (19) | A (=17) | B (=18) |
| a. | VS ₁ | O ₁ V |
| b. | S ₂ VS ₁ | O ₁ VO ₂ |
| c. | VS ₁ S ₃ | O ₃ O ₁ V |

な、無色の意味をもつ文(=a)では一度だけ出現する (S₁O₁)。しかもこれは常に義務的で、接辞形又は後接代名詞形を欠いた(20)(21)は非文法的である。更に S₁O₁ 両者は独立した音形的強勢が与えられず、自立的地位を保てないで動詞に後接・前接化されてしまう。強意形代名詞は動詞を

- (20) a. *Habl- español.
- b. *Yo habl- español.
- c. *Habl- yo español.
- (21) a. *Espero.
- b. *Espero a él.
- c. *A él espero.

真中にはさみ、それぞれ S₁O₁ の反対側に現われる。S₂O₂ は共に文中で強勢をもつのが、S₁O₁ と異なる点である。(17b), (18b) のタイプは代名詞が [+emphasis] 又は [+contrast] を指定されている時生じるが、重要な制限がある。即ち、目的語であっても主語であっても、代名詞が

- (22) *He traído el libro: aquí lo tienes a él.
- (23) *He traído el libro: él está aquí.

〔-human〕であれば、この種の構文 (=19b) は許されないという事実である。〔+focus〕をもつ強意代名詞形は動詞を飛び越えて S_1O_1 のそれぞれ右、左に移動する (S_3O_3)。以上のような諸事実は主語及び目的格代名詞の派生が別々の現象ではなく一つの一般的な変形として見なければならぬことの十分な根拠になるであろう。

11) 代名詞配置規則

これまで便宜上、主語・目的語を S, O の略号で表わしてきたがこれらの関係概念は深層構造における上位範疇との支配関係によって自動的に決定される。両者は共に NP の node に現われるので、(19 A, B) にそれぞれの基底構造を加えて下記のように書き換えられる。

(24)	A	B
基底	NP V	V NP
a.	V NP	NP V
b.	NP V NP	NP V NP
c.	V NP NP	NP NP V

(24)でAとBは鏡像〔Mirror image〕関係にあるから、両者に共通な規則で a, b, c の各構造を展開することができそうである。まず〔+PRO〕のNPに対しbの構造を、拙稿(1972)で明らかにしたような copying によって派生する変形を想定する。Aの基底から、(25A)により(24Ab)を、Bの基底から(25B)によって(24Bb)を導くことができる。

$$\begin{array}{l}
 (25) \text{ A} \quad X \left(\begin{array}{c} \text{NP} \\ +\text{PRO} \\ +\text{definite} \end{array} \right) V \Rightarrow 1, 2, 3^*2, 4 \\
 \quad \quad \quad 1 \quad \quad 2 \quad \quad 3 \quad 4 \\
 \\
 \text{B} \quad Y V \left(\begin{array}{c} \text{NP} \\ +\text{PRO} \\ +\text{definite} \end{array} \right) X \Rightarrow 4, 2^*3, 2, 1 \\
 \quad \quad \quad 4 \quad 3 \quad \quad 2 \quad \quad 1 \\
 \\
 \quad \quad * \text{ は Chomsky adjunction を示す}
 \end{array}$$

これらの2規則は、Langacker (1969: p. 575~576) の提案する Mirror image convention を拡大して Chomsky adjoin される項をすべて独立項とみなせば、下記の1規則として表記される。

$$(26) \quad X \left(\begin{array}{c} \text{NP} \\ +\text{PRO} \\ +\text{definite} \end{array} \right) V \Rightarrow 1, 2, 3^*2, 4 \\
 \quad \quad \quad 1 \quad \quad 2 \quad \quad 3 \quad 4$$

(24) b の構造で、〔-human〕, 〔-emphasis〕, 〔-contrast〕のいずれかを持つ人称代名詞は義務的に削除されなければならない。

$$(27) \quad X \left(\begin{array}{c} \text{NP} \\ +\text{PRO} \\ +\text{definite} \\ \left\{ \begin{array}{l} -\text{human} \\ -\text{emph.} \\ -\text{contr.} \end{array} \right\} \end{array} \right) YVZ \Rightarrow 1, \phi, 3, 4, 5 \\
 \quad \quad \quad 1 \quad \quad 2 \quad \quad 3 \quad 4 \quad 5$$

又, [+human] に加え [+emphasis] [+contrast] のどちらかの素性を指定されている場合は (27)は適用されず (17b) (18b) のごとく *yo, él* などの強意形が現われる。さらに [+focus] の強意形代名詞を動詞の対岸位置へ並べ換える変形には, Topicalization, Right Dislocation の他, (28)がある。(26)(27)(28)の3規則はいずれも鏡像規則で, 西語の主語・目的語代名詞に共通する大きな特徴を簡明に表わしている。

$$\begin{array}{ccccccc}
 (28) & & X & \left[\begin{array}{c} \text{NP} \\ +\text{PRO} \\ +\text{human} \\ +\text{focus} \end{array} \right] & V & Y & \Rightarrow 1, \phi, 3+2, 4 \\
 & & 1 & & 2 & & 3 \quad 4
 \end{array}$$

主語代名詞削除と一致規則を切り離して別個に考える時このような一般性を見失う恐れがある。主語が人称代名詞である場合, 動詞の人称語尾は一致によって作り出されるというよりむしろ代名詞主語自身であるという主張の根拠はこれにより一層明らかになったと思う。最初に取り上げた無主語現象は, 従って, 代名詞の形成・位置を特徴づける一連の規則(26)~(28)の中でとらえなければならない。当然ながら, 主語削除説はここに見たような一般的事実を見落しているため無主語文の説明として正しいとは思われない。特に, Goldin の Anaphora は変形規則の形式に対する原則から逸脱して復元可能性 [recoverability] の条件を破る他, 代名詞化を任意的と見るなど, (9)は根本的に疑わしい。

12) usted, ustedes と主語削除

usted とその複数形 ustedes は代名詞なのだろうか? もしそうだとすれば(26)~(28)の適用を受けることになる。usted, ustedes は *tú, vosotros* と同様 addressee を指示する働きを持つが, 前者は文中で使用されている時でも強意性や対比性が後者や他の代名詞に比べて希薄のように感じられる。実際 usted, ustedes 両形の使用率はきわ立って高く, 各々68%, 51% (拙稿1968: p. 112) を示している。このことは, これらの形式が(11)でみた代名詞配置の諸規則では説明が困難なことを示唆する。むしろ歴史的起源がそうだったように usted, ustedes 両形は統語論上名詞とみなすべき有力な根拠が3つある。1つは, (7c)(29)のようにそれらが3人称の動詞形と一致する事実である。更に Vd., Vds. の anaphoric 目的格代名詞の非強意形は *le, lo, la; les*, (7c) Vd. estudia el español.

(29) Vds. estudian el español.

los, las, se など3人称 i. e. 一般の名詞のそれと同じである。3番目にその所有形 *su, suyo* も又, *él, ella, ellos, ellas* など3人称代名詞の所有形と共通であることがあげられる。これらの統語的特性は usted, ustedes を名詞として扱うのに十分である。ただ一般名詞と異り, addressee を意味するこれら二つの名詞は, 一定の Text 中で文境界を越えて anaphoric 代名詞化が行なわれないという特殊性を持つことである。(30)では *tiene* の主語は *él* 又は *ella* が(27)

(30) Vd. no está bien todavía. Tiene muy mala cara.

により削除されたのではなく, usted が直接削除を受けたと考えられる。現代西語においては(名詞)主語削除は usted, ustedes のみに起こる局所的な現象である。

西語代名詞の形成とその位置については派生全般にわたる大きな特徴が存在することがわかつ

た。特に主語及び目的語としての定代名詞が動詞を中心にした鏡像関係にあり、表面構造における非強意形・強意形の出現、移動を一連の変形規則で同時に規定できることを示した。そしてこの一般的性質を正確に捉えるために、従来の主語代名詞削除や一致規則をこの観点から改めて位置づけたり分解する必要が起こり、動詞屈折接辞に含まれる人称・数要素に独立した非強意代名詞の地位を認めた。以上の指摘から、本稿の論題に対する結論は次のようになるだろう。

主語の代名詞削除は確かに存在する。しかしそれは、2)で見た任意的代名詞削除説のような形としては存在しない。主語代名詞の削除は孤立した現象ではなく、代名詞の派生全体の一局面であるからこの有機的連関の中で、主語だけでない一般的な代名詞削除規則として把握する必要がある。

(1972年 8 月 10 日)

〔註〕

1. Bull (1965) も、人称代名詞に限らず代名詞は一般に形容詞的残余 *adjectival residue* であるとする説を論じている (pp. 248—249)。
2. *Caminamos todo el día* のような文について、一致規則適用前に何らかの一人称要素が存在して、後に任意的に削除されると認める (p. 22 : 下点, 出口)。
3. 例えば Academia (1931 : p. 160), Meza (1955 : p. 249), Martínez Amador (1960 : p. 1216), Moliner (1969 : p. 857), Gili Gaya (1970 : p. 23,) p. 92) など。
4. 音形規則の適用による屈折形の具体的な導出例については J. Harris (1969), 拙稿 (1971) を見よ。
5. Pottier (1969 : p. 12) は簡単な記述であるが「主語は一般に動詞形の中に併合されている」(*Le sujet est généralement incorporé à la forme verbale*) と言い切る。ただし具体的な代名詞形を示していない。彼は又、強調と非強調を対比させ、強調の手段としての形態素の付加があると述べ、*Yo te dije* の例文を引く (1969 : p. 89)。Pottier (1968 : p. 106) にもやや不明確だが同様な見解が示されている。これは本稿の主張するところと基本的に同じである。

引用文献

- Alonso, M. (1968) : *Gramática del español contemporáneo*, Madrid
 Bull, W. E. (1965) : *Spanish for teachers*, Applied linguistics, New York
 Criado de Val, M. (1957) : *Fisnomía del idioma español*, Madrid
 Gili Gaya, S. (1970) : *Curso superior de sintaxis española*, Barcelona
 Goldin, M. G. (1968) : *Spanish case and function*, Washington D. C.
 Hall, Jr. R. A. (1945) : Spanish inflection, *Studies in Linguistics* 3, pp. 24—36
 Harris, J. W. (1969) : *Spanish phonology*, Cambridge Mass.
 Hockett, C. F. (1947) : Problems of morphemic analysis, *Language* 23, pp. 321—343
 Langacker, R. W. (1968) : Review of R. P. Stockwell et al., *The grammatical structures of*

- English and Spanish, *Foundations of Language* 4, pp. 211—218
- (1969) : Mirror image rules, I, II, *Language* 45, pp. 575—598, 845—862
- (1970) : Review of M. G. Goldin, Spanish case and function, *Language* 46, pp. 167—185
- Martínez Amador, E. M. (1966) : Diccionario gramatical y de dudas del idioma, Barcelona
- Meza T. J. (1955) : Gramática castellana del siglo XX, Santiago de Chile
- Moliner, M. (1966) : Diccionario de uso del español II, Madrid
- Nida, E. A. (1949) : Morphology, the descriptive analysis of word, Ann Arbor
- Pottier, B. (1968) : Presentación de la lingüística, Madrid
- (1969) : Grammaire de l'espagnol, Paris
- Real Academia Española (1931) : Gramática de la lengua española, Madrid
- Saporta, S. (1959) : Spanish person marker, *Language* 35, pp. 612—615
- Stockwell, R. P., Bowen, J. D., Martin, J. N. (1965) : The grammatical structures of English and Spanish, Chicago
- 拙稿 (1968) : 主語人称代名詞の使用と省略について, *Estudios Hispánicos* 1, pp. 104—118
- „ (1971) : スペイン語動詞屈折語尾の構造, 大阪外大学報23号, pp. 35—60
- „ (1972) : スペイン語人称目的格と代名詞化, 大阪外大学報26号, pp. 1—18